

毛皮を買うヴェーナス

杉森 久英

毛皮を買うヴェーナス

杉森 久英



毎日新聞社

毛皮を買うヴィーナス 五六〇円

昭和四十七年四月二十五日 印刷
昭和四十七年五月五日 発行

著者 杉森久英

編集人 浜田琉司

発行人 朝居正彦

発行所 毎日新聞社

東京都千代田区一ツ橋

大阪市北区堂島上

北九州市小倉区紺屋町

名古屋市中村区堀内町

印刷 東京ベル印刷

製本 田中製本

目次

毛皮を買うヴィーナス	3
炎の中	29
風流花火	55
身がわり講演	81
徴兵忌避者	103
むかしの人	147
降るあめりか	173
軟らかな船	201
春色二刀流	223

毛皮をかうヴェーナス

私は日本人だろうか？

いや。私の父は中国人で、上海高等法院の首席検察官である。その世界では、有能な人物であるという。その娘の私も、中国人として育てられた。

しかし、私の母は日本人である。くわしい事は知らないが、父が法律の勉強に日本へ留学していたころ、結婚したものらしい。

私は中国人にちがいないが、家庭では日本風に育てられた。父は有能な人物によくあるように、仕事に追われて、家庭をかえりみないので、私の養育のことはどうしても、母まかせになりがちである。母はもちろん父を愛してはいたけれど、父が中国人であることが気にいらなかった。それならば、結婚しなければよさそうなものだが、人はかならずしも、隅から隅まで気にいった人と結婚するものとはかぎらない。

父や母の若かったころ——現在だってそうだが——日本人は中国人を人種的に一段下等と見るかたむきがあり、母はそういう異人種と結婚したことを、残念に思っていた。この残念さは、結婚当時は、二人の熱烈な愛によってまぎれていたが、時が経ち、熱がさめるに従って、頭をもたげて来たものらしい。

したがって、彼女は私を育てるにあたって、なるべく日本風にしようとした。行儀作法や、日常の趣味や、食べ物の好みなどに、日本風を残しておきたいと思ったのである。

彼女自身は、若かったころは、それほど日本の伝統的精神を尊重しなかったくせに、父と結婚して

から、かえって日本人としての自覚をやかましく言う気になったらしい。彼女は中国人である私を、自分自身よりもっと古風な日本娘に育てようという気になったらしい。

そこで私は、中国人としても日本人としても通用するような娘になった。学校や教会へ行けば、中国人の友達と中国語でしゃべり、中国語で泣いたり笑ったりしたが、家庭へ帰ると、日本語で話した。父は日本へ留学しただけあって、日本語は自由だったが、母は向上心や知識欲というものをまるで欠いていたから、中国語をおぼえようという気がなく、勢い、家ではみんな日本語によらなければ、用がたせなかった。

彼女は東京の神田の生れで、そこで通用する下町言葉は、日本中で一番歯切れのいい、さわやかな、洗練されたものだといって、いつも御自慢で、私にそっくりそのまま移し植えようとしたから、私は上海にいたいという日本人よりも、あざやかな日本語をあやつることができた。上海へは日本の各地方から、種々雑多な人間が流れ込んで来たが、生粋の東京生れはほとんどなく、みんなナマリの強い、濁声だみごえの田舎言葉をしゃべる手合いばかりだったから、そんな中に入ると、私のほうがよっぽど小いきな、スマートな日本人にみえた。

私の外見も、中国人と日本人のいいところを兼ね備えていた。私は背がすらりとして、姿勢のいいところは中国風であり、顔立ちは日本風だと思っている。自分でいうのもおかしいが、まず、美人だといっているであろう。お世辞にしろ、面とむかってそう言ってくれる人もあるし、道があるいても、通りすがりの男のあこがれるような、感嘆するような視線が、それを語っていた。

私は中国人にも日本人にも友達がたくさんあった。どこへ行っても、私は人に愛され、歓迎され、人気者になった。

そんな私を、スパイに使おうと思う人が出てくるのも、無理はなかった。

中国人からみれば、私は日本人の間に顔が広くて、日本人の社会へ自由に出入りしていたから、日本人のことを探らせるに最適の人物に見えた。同様にして、日本人からも、私は中国のことを聞き出すに都合のいい人間にみえた。

私自身はどうかといえば、自分の生れ、育った、そして国籍もある中国を愛していた。そして日本の兵隊が、はるばる海を越えてやって来て、自分の国でもないところで、自分の国のように我儘に振舞うのを憎んでいた。

私は日本を愛しないわけではなかった。母の生れた国、自分もその血を受けた日本は、なつかしい国である。

しかし、戦争がはじまると、波濤のように大陸へ押し寄せて来て、中国人を殺したり、家を焼いたり、掠奪したり、どなったり、いばり散らしたりする日本の軍隊は、私の愛するなつかしい日本人とは、まるでべつの民族のようにみえた。

こういう私が、重慶政府のために日本軍の情報をさぐるスパイの役を買って出るようになったことは、自然であった。

もちろん、私がスパイになったのは、愛国心の故ばかりではなかった。このことは、はっきり言っ

ておかねばならない。私は歴史上有名な志士や烈女のように、ひたすら国を愛する至情に燃えて、死が口をあけている中へ身を投じたというわけではなかった。私はそれほど崇高な志操の持ち主ではない。

第一に、私はお金が入るのが嬉しかった。

私は美人である。美人は自分の美貌を引き立たせるために、美しい着物を着、高価な装身具を身につける権利がある。ところが、まじめな司法官である私の父には、それほど経済的余裕のあらうはずがない。私はいつも質素なみなりをしていなければならなかった。町をあるいても、自分より醜い女が、豪華な装いをしているのを見ると、私は目がくらむほど腹が立った。

ところが、重慶政府の秘密機関は、私に思いがけぬ大金を支給することを約束してくれた。これで私は、自分の美貌にふさわしい装いをとることができる。私は自尊心を満足させることができる。

第二に、私は危険をたのしむことができた。中国と日本の戦争という、歴史上稀な大事件の渦中に飛び込んで、敵の情報をつぎつぎと、それを我が軍に知らせるとは、何とスリルに満ちた、英雄的な行為であろう。何とたのしいスポーツであろう。

第三に、私は大勢の男たちが私の魅力の前にひれ伏すのがたのしかった。私は子供のときから、自分の美貌が多くの人たちをひきつけることを知っている。しかし、それらはいいて中国人である。ところが、いま私に与えられた課題は、日本人の男たちにむかって、私の美貌の影響をためすこと

である。母の祖国である、なつかしい日本——私はその血をひいていることを誇りとしている日本、しかし、今は、征服者として中国に君臨している、憎らしい日本——その日本の男たちを、私の魅力の俘虜にしようというのである。こんな楽しい、そして張り合いのある仕事があるうか。

私が秘密機関の工作員を命ぜられたのは、ちょうど汪精衛が重慶を脱出したころであった。

中国の抗戦が永びくにつれて、家を焼かれ、肉親を失った民衆の苦しみは激しくなり、このままでは民族は滅亡に立ち至るだろうという悲観論が強くなった。

この機会をとらえて立ち上ったのが、汪精衛である。重慶政府は主席蔣介石の呼号する徹底抗戦のスローガンにひきずられて、悲壮の気がみなぎり、うっかり和平のことを口にすることもできない空気が、一部には、これ以上抗戦を続けて、人民に塗炭の苦しみを味わわせるにしのびないという声があり、汪精衛はそれを代弁して、たびたび蔣介石と激論した。

汪精衛が和平を主張するには、それだけの根拠があった。前年から彼の腹心の董道寧（国民政府外交部重州司日本科長）、高宗武（前重州司長）らが日本の影佐禎昭大佐（参謀本部謀略課長、ついで陸軍省軍務課長）、今井武夫中佐（参謀本部支那班長）、犬養健（通信参与官）らとひそかに、会談をつづけて、和平の条件について一応の諒解に達していたのである。

しかし蔣介石は和平論に耳を傾けようとしなかった。彼は日本の陸軍を信用せず、むしろ英米の軍事援助に望みをかけて、日本の戦力の崩壊を待つことを主張した。

そこで、汪精衛は重慶を脱出して、外部から和平工作を推進することを決意した。

汪精衛はおそらく、自分がひとたび和平論をとなえて立ち上れば、あとに続く者が、つぎつぎに現われるだろうと信じているにちがいない。

たしかに、彼は現代中国で第一等の人物である。彼は若いときから中国革命の父といわれた孫文に従って、国事に奔走し、そのなくなったあとは、彼の衣鉢をつぐ者と、自分でも認め、他も信じている。彼は重慶では、国民党の副総理、中央政治会議主席、国民参政会議議長という要職を兼ね、蔣介石主席とならぶ人望と名声の持ち主である。いや、革命家としての経歴からいえば、彼は蔣主席より先輩である。

しかし、汪精衛はおそらく自己の力を過信していたことを、まもなくさとらねばならなかった。昭和十三年の十二月十八日、彼は夫人の陳璧君、秘書の曾仲鳴らをつれて、飛行機で重慶を脱出すると、ハノイに着き、そこで長文の和平論を発表するとともに、蔣介石主席と国民党中央委員会へ打電した。汪精衛が重慶を脱出したというニュースを聞いたとたんに、私たちの頭にまず浮んだ考えは、彼はまちがっているということだった。

重慶を飛び出す前に、彼が日本側といろんな方法で打ち合せをしていることは明らかである。飛び出してからも、日本側の援助を受けている。たとえその目的が、抗戦のために疲弊した民衆の苦痛を救うことにあるとしても、現在弾丸を撃ちあっている敵と、裏面でひそかに気脈を通じているというだけで、素朴な国民感情には、納得できないものがある。そのことに気がつかない汪精衛は、一番大事な一点で、大きな誤りをおかしたといわねばならないだろう。

重慶政府はただちに汪の公職ならびに党籍を剝奪し、追放に処するとともに、無数の暗殺団をハノイへ派遣して、彼の周囲をつけねらわせた。その中の一人は彼の居館まで忍び込み、自動小銃を連射した。倒れたのは汪自身でなく、身代りになった曾仲鳴だったけれど、ともかく、彼を死の一步手前まで脅かすことができたことは事実である。

日本軍はあわてて汪を安全な場所へ移そうと、影佐大佐、犬養健をハノイに急派して、山下汽船の北光丸にのせ、上海へつれて来させた。これらは極秘のうちにおこなわれたけれど、そうそう隠しきれものではない。汪精衛が日本に買収され、日本人によって護衛されているという事実は、誰知らぬ者もなく、中国人の間で彼の人気はガタ落ちになりつつある。

汪精衛は上海に落ちつくまもなく、日本に渡り、平沼首相、板垣陸相、米内海相らと会見して、今後の方針を相談し、ふたたび上海に帰ると、新政権樹立の準備に取りかかったらしい。重慶政府側では、彼等が何をたくらみつつあるかを、すこしでも早く知る必要があった。

重慶政府の秘密警察本部から、私にむかつて、北四川路の梅華堂に注意せよという指令が来たのは、この頃であった。梅華堂というと、ひどく風流な建物のように聞こえるかも知れないが、行ってみると、どこにでもありふれたイギリス風の古い建築である。ただ入り口に「梅華堂」と彫刻した古い扁額が下っているきりで、見たところ普通の商社とすこしも変っていない。しかし、これが日本政府の汪精衛擁立の工作を担当する秘密機関で、日本側はこれを「梅機関」と呼んでいることを、あとで知った。影佐大佐が中心人物なので、影佐機関とも言うらしい。

私に与えられた任務は、この梅機関に出入りして、そこで行われている工作の秘密をさぐることである。しかし、これほどむずかしいことはない。大体、汪精衛の和平工作そのものが、嚴重な秘密のうちに進められ、スパイ活動に対して警戒網が張りめぐらされている。そこから何かを盗み出すことは、難事中的の難事といわねばならない。

この大役が私に振りかかって来たのは、多分私の母が日本人で、日本語が自由に話せるという理由からであつたろう。私が日本人の血をひいていて、日本に愛着を抱いていることは事実だけれど、それは現在上海を占領して、我が物顔に振舞っている、傲慢な、居丈高な軍人のことではない。私の好きな日本と、そこいらを肩で風切つてあるいている日本人とは、まったく別物である。

しかし、そんなことまで、人は知りはない。人はおそらく、私が半分日本人だと聞いただけで、それでは日本を愛しているだろう、日本軍にも好意を持っているだろうと思うかもしれない。

さらに進んで、人は私から、中国側の情報が聞けるかも知れないと思うかも知れない。私は上海で生れて、中国語を話し、中国のことなら何でも知っている。私を手なづけ、スパイに仕立て上げれば、すばらしい働きをするだろうと思うかもしれない。

だとすると、そこがつけ目である。私は何くわぬ顔をして、梅華堂へ出入りしよう。私が重慶側の工作員の一人として登録されていることは、誰も知らないはずである。私は正々堂々と、悪びれず、すこしもやましい所のないような顔をして、梅華堂へあそびにゆこう。日本は私の母の国である。そのなつかしい国の人たちがいるところへ、なつかしさのあまり遊びにいったとて、何の不思議がある

う……そして、彼等がもし私を日本側のスパイとして利用しようとする風が見えたら、よろこんで利用されてやろう。日本側のスパイになって、ある程度中国側の情報を提供しながら、一方では中国側のために日本側の情報を取るのだ…… Give and take……鯛を釣ろうと思ったら、海老くらいは奮発しなければなるまい……。

こう思った私は、まもなく梅華堂——梅機関勤務の若い将校Kと知り合った。知り合うのは、それほどむずかしいことではない。独身で外地勤務の将校は、たいてい町に何軒か、行きつけの酒場を持っているものであり、それを調べ上げるのは、それほどむずかしいことではない。そして私はといえば、上海では相当の不良少女として知られるほど、そこいらを飲み廻っていたのである。もちろん、噂を立てられた男も二人や三人ではなかった。世間の野暮な堅気女は何とか知らないけれど、私はこれを、美しく生れた女の特権とと思っている。くやしかったら、真似をしてみるがいい。

K中尉は士官学校を出て何年かたっているはずだけれど、まだうぶで、いかにも青年らしい生一本なところの抜けない男であった。飲むことはよく飲むけれど、女の方の経験はあまりないらしく、身のこなしがぎごちなくて、私が上等の香水の匂う身体を、わざと擦り寄せると、反射的に避けようとするほどであった。暴れ馬や兵隊の取り扱い方は教えても、女性のやさしい抱き方を教えないのは、日本の士官学校教育の最大の欠陥の一つである。

まもなく彼は、本気で私に恋をしはじめたようであった。私は男に恋せられることは、すこしも珍しくない。それも、戯れの恋ではない。真剣な恋である。

私が不良で、何人もの男の間を渡り歩いたことは、誰でも知っている。したがって、私は昔風の貞潔の觀念からみれば、汚れた、ただれきった女のはずである。私はそれをよく自覺している。私の身体には、いろんな男の残した傷痕が、汚点のように残っている。

にもかかわらず、たくさんの男が、真剣に私を恋するというのは、どういうわけであろうか。彼等はたいてい、まじめで、誠実な男である。そういう男にかぎって、真剣に私のために身をほろぼしてもいいと誓うのである。そんなとき私は、

「あたしは不良よ。悪い女だわ。あなたのような、立派な人の奥さんになれない女よ……」

といって、身を引くようにするのだが、引けば引くほど、彼等は追いかけてくる。それも、うぶな、きまじめな男にかぎって、熱心に追いかけてくるのである。

どうしたことだろうか、私がわけても、うぶな、まじめな男を夢中にさせるといふのは？ ……私

自身ふまじめな女なのに、選りに選って、まじめな男ばかり、私のまわりに集まるとは？ ……まじめな男は、まじめな女を好きになればよさそうなものののに……。

そしてK中尉もその一人であつた。彼はよく私に電話をかけて来て、食事に誘つたり、映画に誘つたりした。

私のほうでK中尉をどう思っていたか、はっきり言えない。どんな女性だって、自分にひたむきに打ち込んで来る男を、憎く思う道理はないものである。私はこれまでに私に打ち込んで来た男の、どの一人に対しても、それと同じ熱情で応えはしなかったとしても、けっして冷たくあしらいはしな

った。人は私を浮気者と呼ぶかもしれない。しかし、その一人一人に対しては、私はそのたびごとに温かく応えたつもりである。

まもなく、私は梅華堂へときどき遊びにゆくようになった。梅華堂は表向きは何かの商社の支店ということになっているから、もちろん、そこいらに軍事的に秘密とされるような物がほうり出してあるはずがない。

また、私が梅華堂へあそびにゆくのは、表むきどこまでもK中尉に会いたくてゆくのにはすぎないから、たとえそこいらに秘密書類のようなものがほうり出してあっても、それに興味を持つ風を、微塵（みじん）も見せてはいけない。私はただ、かわいい中尉さんのKに会いたい一心で、やって来たという顔をしていなければならない。

梅華堂は表むき商社だから、ここに出入りするものは、みんな会社員である。彼等はいかにも会社員らしく、背広を着て、しゃれたネクタイをつけたりしている。しかし、何といても、素性は隠しきれものではない。彼等の口に焼けた首筋や、精悍（せいかん）な目つきや、キツパリした言葉遣いや、ドシンドシンと床を踏みつける足どりなどの中に、どうみても勇壮活潑な軍人らしいお里が丸出しになっている。仕立てのいい背広の下に、馬術の名人や、柔剣道何段の肉体がはち切れそうに盛り上っているのが、一目で見てとれるのである。

私は梅華堂へたびたび遊びにゆくうちに、そこに働いている人がぼんやり見分けられるようになった。代議士で通信参与官の犬養健、陸軍大佐の影佐禎昭、外務省書記官の矢野征記などといった人た